

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成17年8月号

平成十七年八月一日発行 第十六卷第八号 通巻第一七〇号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



# 東長密寺

高橋将夫

真桑瓜傷ついてゐて甘かりき  
白玉の一つで万事をさまりし  
修羅場なき生涯なりき白緋  
還暦を過ぎて開けし夏野かな

吸ふよりは吐くが大事や冷奴  
そんなはずないと鯰が浮いてきし  
蟬生まれ己が殻をつかみをる  
蝙蝠が来て新しき闇となる  
大南風のはかたこちよらうなみまくら  
蟻地獄跨ぎ東長密寺かな  
空海の影の涼しき千字文

## 槐賞受賞作品二十句

近藤喜子

人肌の匂ひ濃くなる竹の秋  
里人にぶつかつてくる蛸かな  
蝸牛のまなじり少し濡れぬたる  
たつぷりと食べそれからの夏野かな  
角ばつて干されてをりぬ尾花蛸  
まなざしの遠くなりたる汐干瀉  
ひやかや小さくなりたる針の穴  
星々の座を組む烏瓜の花  
鼓草ぽぽぽ子供歌舞伎かな  
狐火のえつさほいさと闇支ふ

マンゴーの果肉ルノアールの女  
蚕豆になるぞなるぞと咲きにけり  
大鷹の原野ひつ下げ翔ちにけり  
クリムトの金箔いてふ落葉かな  
冬銀河けものの耳の尖るとき  
炎帝の腕かひなひろげし中にゐる  
白帝の投げおろしたる夕日かな  
葛の葉のひるがへるとき神の色  
たましひの一連ひとつらなりに雁わたる  
白ふくろふ精霊ことごとく見ゆる

## 槐賞受賞作品二十句「春夏抄」

中野京子

桃の花「鯨と犀」を開きをり  
先生のヨガの二の腕夏隣  
桃咲いて濃くなつてゆく影法師  
此所この声に緋目高のぞきをり  
頤を巽の空に桃の花  
芭蕉葉の玉解きつづく日和なり  
桃咲くや翁童の筆の数  
はじめての竹の皮脱ぐ朝かな  
硯墨紙をひろげし桃の花  
みたりゐて四人くははり心太  
良寛の墨かけ桃の花の風  
水音やつられて仰ぐ朴の花  
桃咲いて地図なき道に出でにけり  
滴れる山より生れ星の渦  
山と畑万朶の桃の花なりき  
空と海室戸の虹の濃き日なり  
日の中の牛の微睡桃の花  
笑ふ面の目に立つてきし木下闇  
桃の花左右の闇の近づけり  
満身の木霊槐の花明り

日 本 海

中 道 愛 子

仙 厓 の 書 の 丸 四 角 初 曆  
七 種 を 打 て ば ひ び き し 日 本 海  
雪 解 水 大 山 の 谷 ゆ た か な り  
赤 ん 坊 あ や し て ゐ た り 春 隣  
ひ し 餅 や 父 の 大 き な た な ご こ ろ  
春 田 打 つ 紺 緋 の 母 若 か り し  
虎 杖 を 折 る や 遠 く に 川 の 音  
花 大 根 母 の 齡 と な り て 来 し  
う す う す と 隠 岐 の 島 か げ 梨 の 花  
亀 鳴 く や 玄 米 の め し か み し め て

特別作品

蒲の花神代につづく渚かな  
生節と露煮て午後のジャズダンス  
在りし日の父高々と菖蒲葺く  
飛魚の鰭貼つてあり裏戸口  
飛魚のつみれつくりし出雲かな  
大山のふもとなりけり更衣  
生きぬいて夏大根のやうなもの  
水母うく沖に大きな貨物船  
風紋の砂灼けてをり琴ヶ浦  
石蓴搔く女のかこむかまどの火

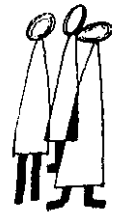
# 槐安集

市場基巳

中日に笑ふて触れな他人の手に  
春の鶉の一羽はことのほか静か  
池に出る道でこぼことつくしんぼ  
すぐ寝つく老いたる兄と花杏  
鶯とみんなが少しづつ老いる

水野恒彦

雨降つて懈怠のときの葱坊主  
卯月野を往き来て少し老いたり  
なにごととも齡の白地着てをりぬ  
海鞘食ふや構へてこともなかりける  
蝉穴に体の影が被さりぬ



石脇みはる

むこうずね丸出しにして松の花  
住吉の石路むら夏の兆あり  
椰の木の肌をつたひし夏の雨  
更衣罌粟は坊主になつてをり  
昼の雨大山蓮華の蕾かな

竹内悦子

青葉風方丈の間に木魚あり  
まくなぎや舞妓の持てる蛇の目傘  
玻璃ごしの楓の花と銀の匙  
竹皮を脱ぐや鯖ずし八等分  
剪定の櫟並木や双子の嬰こ



延 広 禎 一

大安や孵化のはんざき眼のまるき  
蒲の晴一位の箸を出されける  
聖天に舞妓団扇の置かれあり  
隈取を拭ふ役者や粽の香  
楽天や馬うまづら面はら剥はぎを捌きををる

中 島 陽 華

天空へ本を積みゆく罌粟の花  
高足駄役行者の素足かな  
クラインの壺は空なり夏祓  
かけまくもかしこきみ熊野の夏に  
宗像は父のふるさと金鳳華

栗 栖 恵 通 子

大日のはらわた夏のまくらがり  
星の渦羅といてをりにける  
はんざきの貌して母の逝きにけり  
めまとひと払ふてゐたり黄泉の蓋  
海老蔵を見て来し夜の螢かな

加 藤 み き

招猫の座布団厚し半夏生  
露味噌や藤いろ似合ふ背筋なり  
朴の花肩のちからを抜いてをり  
蟻蠓の黒子めきたる動きかな  
出入や泰山木の花の下

大島翠木

そのときの君に虎杖折りし音  
半袖に更衣する待たれよと  
どちらかと言へば木綿の冷奴  
壬生の鉦面光らせて畏る  
折からの雨間の日ざし山椒魚はんざきに

雨村敏子

花の山一切のこと忘じける  
からだより入つてゆきし紫雲英畑  
山と山のあはひに水音鎮花  
青齒朶に齋屋の日差しのありにけり  
夏霧の晴れしところの金鳳花

黒田咲子

水蠶やどに翅らしき八十八夜かな  
鴉どち代田に濡れて鉄骨へ  
大木をくりぬいて舟月見草  
てのひらの水母いかやうにもなれり  
昼の蛾の雨に舞ひこむ傘の内



# 槐市集

鈴木勢津子

神鶏や新樹の闇の中にゐる  
見渡す限り種蒔く島田娘かな  
白地着て居並ぶ露天往来す  
地上絵のはるかな大地喜雨のあり  
松の芯こぞりて競え五月尽

(山の形を以て島田娘に比喩する)

瀬川公馨

下野草しもつけの草に溺れてゐたるなり  
春の魁猫の毛玉を吐いてをる  
一本の桜の根方西行ぞ  
春眠やホットミルクの皮あつし  
めまとひの波状攻撃くらひけり

十川たかし

水郷や田植歸りの手漕舟  
芥子の花墓地の厨の日陰にも  
銭葵正午の色となりにけり  
タイヤ焼く匂ひ海鷗の崖崩れ  
躑躅燃え浮き上らむとする気球

醍醐季世女

リラの風ひとまわりして戻りけり  
初蝶や忘れな草を淡くして  
藤の花未だ蕾の塩地藏  
そら豆の餡あんの饅頭望郷歌  
鶯や地を彩りて諸葛菜



# 槐集

## 高橋将夫選

人は舟人は水なり朴の花  
枚方

中野 京子

わし星雲白鷺ゆるりゆるりかな  
岡崎

岩月優美子

白玉の掌にわきつぎし竹の風

飛鳥路に余花ひとひらの風ありき

柿若葉なぞなぞ問答埴輪の目

ばら園のばら剪る男日本晴

開けたる空しやらしやらと春の蟬  
岡崎

近藤 喜子

筍を姿焼して飛鳥かな  
枚方

谷村 幸子

木耳や森の生気の集まり来

ぼうたんを見つめし眼向けらるる

考へる刻もたらしぬ青葉木菟

こんな夜は家ごと眠る植田かな

炮烙の一、二は割れず壬生念佛  
枚方

近藤きくえ

竹叢の波光浄土の立夏かな  
東京

西村 純

朱雀門をくぐりてゐたる奈良晒布

朝日浴ぶ南円堂の花橘

金雀枝のこがねの雫掌に

昨夜の鬱ふつきれてをり朱き薔薇

日と月の回り舞台や新茶古茶  
しばらくは蜷と歩むか阿修羅道

# 銀河往来 高橋将夫

## ◇俳句曼荼羅

### 《俳句という詩型》

俳句の歴史は連句から独立した発句に始まり、子規、虚子を  
経て現在に至るが、その中で培われてきたことが俳句の伝統と  
いうことになろう。この歴史の中で俳句の形式や、本質につい  
て、様々な議論や試みがなされてきた。芭蕉の「わび、さび」  
の世界、明治末期の新傾向俳句から自由律への動き、昭和初期  
の新興俳句から無季への動き等々。このような歴史過程にあっ  
て、「有季・定型と切れ字」という俳句形式の流れは脈々と続  
いてきた。伝統とは主に精神的なあり方を言うようだが、俳句  
の場合「伝統性」は結局この俳句形式に帰着すると思う。例えば、  
日本画、茶道、花道等には様式がある。そういった様式の部分  
にあたる。伝統として守られるべきであり、それゆえに時とし  
て破壊の対象となる部分である。

俳句の骨法ということを目にする。多くは実作の経験の中で  
培われてきた事柄である。「モノで表す」、「省略の文芸」など  
表現手法に係る事項が多い。これらの基本的な事項は伝承しや  
すいが、基本はあくまで基本で、それ以上のものでないことを  
認識しておく必要がある。

### 《俳句の本質》

俳句の本質に関して言えば、そこに「伝統性」はない。例え  
ば、明治以降の客観写生の手法による作品が伝統であり、芭蕉、  
蕪村、一茶の世界や抒情、思想性といったもろもろの世界は「伝  
統性」から除かれてしまおうといった考え方はありえない。敢え  
て言うならば、「伝統性」は過去の歴史の一切を包含して、か  
つ「無」であり「空」なのである。伝統・前衛、客観・主観、

写生・抒情等的一切を包含して空と考える。

朝があり夜がある。陰陽、明暗、男女：これらのどちらか一  
方だけが正しいとは誰も言えない。自然は、宇宙はそれら一切  
を含みカオスである。それでもなおかつ、その中に何か法則、  
真理がありそうな気がする。「存在」、「神」、「グレートサムシ  
ング」等と呼ばれる何かがある。

「槐」は先師岡井省二以来、「俳句は精神の風景」、「存在の詩」  
を基調に曼荼羅ルネサンスを展開してきた。ここでいう「存在」  
も、「曼荼羅」が象徴する「華厳・密教的宇宙観、世界観」も  
実は前述の諸相融合の世界に他ならない。ちなみに、融合は主  
客、写生・抒情を足して二で割ることではない。中庸の意味で  
ないのはもとよりのことである。

ところで、長い歴史を経て俳句は今や百花繚乱の時期にあっ  
ておかしくないと思う。ところが、現状はそうではない。いわ  
ゆる報告俳句、レポート俳句が溢れているこの現状は長い歴史  
の中での自然淘汰の結果なのか。もし、これが俳壇の権威、あ  
るいはマスコミなど、一部の層の意図的なリードの結果であ  
るとすれば、これは看過できない問題である。今、俳句に多様性  
が最も求められる時期ではなからうか。

水母からがながぜまでの深さかな 将夫

蝮の道戻りし跡のなかりけり //

(「ウエップ俳句通信 二六号」より転載)

### ◇「槐集」観照

人は舟人は水なり朴の花 中野 京子  
人がなせ舟であり、水なのか。理屈はなんともつく。それよ  
り、時の流れに身を置いている自分をじっくり見つめてみたい  
ものだ。(以下略)